

控物次平形銭

精の雪

堂胡村野

庫文空青

一

昼頃から降り続いた雪が、宵には小やみになりましたが、それでも三寸あまり積つて、
今戸^{いまど}の往来もハタと絶えてしまいました。

越後屋佐吉は、女房のお市^{いち}と差し向いで、長火鉢^{ながひばち}に顔をほてらせながら、二三本あけ
ましたが、寒さのせいか一向発しません。

「銭湯へ行くのはおつくうだし、按摩^{あんま}を取らせたいにも、こんな時は意地が悪く笛も聞え
ないね」

「お前さん、そんな事を言つたつて無理だよ、この雪だもの、目の不自由な者なんか、歩
かれはしない」

そんな事を言いながら、ちようど三本目の雫^{しずく}を切つた時でした。ツイ鼻の先の雨戸をト
ン、トン、トンと軽く叩く者があつたのです。

「おや——」

お市は膝^{ひざ}を立て直しました。宵とはいってもこの大雪に、往来の方へ向いた、入口の格^こ

子を叩くならまだしも、川岸へ廻つて、庭の木戸から縁側の雨戸を叩く者があるとすると、全く唯事ただごとではありません。

「どうしたんだい」

と、佐吉。

「雨戸を叩く者があるんだよ。こんな晩にいやだねえ、本当に」

「開けてみな、貉むじなや狸たぬきなら、早速煮て食おうじゃないか。酒はまだあるが、肴さかなときた日には、ろくな沢庵たくあんもねえ」

佐吉は少し酔っているせいもあつたでしょう。爪楊枝つまようじで歯をせせりながら、太平樂を極めますが、いくらか酒量の少ない女房のお市は、さすがに不気味だったとみえて、幾度も躊躇ためらいながら、それでも立上がつて、雨戸へ手を掛けました。

同時に、もう一度トン、トン、トンと軽く叩く音、続いて若い女の声で、

「ここを開けて下さいな——」

と、大地の底から響くような細かい声が、ハッキリ雨戸の外に聞こえるのです。

「誰だえ」

お市は心張棒しんぱりぼうを外すと、思い切つてガラリと開けました。

角兵衛獅子の親方を振り出しに、女衒ぜげんの真似まねをやったり、遊び人の仲間へ入ったり、今では今戸に一戸を構えて、諸方へ烏からすが金かねを廻し、至って裕福に暮している佐吉の女房です。鬼の亭主に鬼神おにがみで、大概たいがいの物に驚くような女ではありませんが、この時ばかりは全くギョツとしました。

外は真つ白――。

人間はおろか、貉も狸もいる様子はなかったのです。

好い加減に積った雪は、狭い庭を念入りに埋めて、その上に薄月うすづきが射しているのですから、その辺には、物の隈くまもありません。底ひそしの下はほんの少しばかり埋め残してありますが、物馴れたお市の眼には、そこに脱ぎ捨ててある、沓くつぬぎ脱の下駄までハッキリ読めるのです。

「誰も居はしない。変だねえ」

「そんな事があるものか、今も人の声がしていたじゃないか」

「そう言ったつてお前さん、猫の子もないよ」

お市はそう言いながら、戸袋に左手でつかまったまま、まだサラサラと降る雪の中へ、何の気もなく顔を突き出したのでした。

「あッ」

恐ろしい悲鳴。

驚いて佐吉が立上がった時は、お市の身体は、もんどり打って、雪の庭へ——、真つ逆さまに落ちてしまったのでした。

「何て間拔けな事をするんだ。怪我をしないか」

佐吉はそう言いながら、縁側へ飛出して差し覗くと、お市の身体は雪の中に転落して、ノタ打ち廻りながら、

「お化けだッ」

辛くもそう言ったきり、がつくり崩折れてしまった様子です。見ると、頸筋から噴き出した恐ろしい血潮が、お市の半身と、その辺の雪を物凄まじく染めておりますが、見渡したところ、縁の下にも、庭の中にも、お化けはおろか、人間の片々も見えません。

佐吉はそれでも、漸く気を取直して、女房の身体を縁側へ抱き上げましたが、いつの間

にやら、行灯を蹴飛ばして、灯を消してしまった事に気が付きました。

「お駒、大変だッ、灯を持って来い」

少し離れているお勝手へ怒鳴ると、

「ハ、ハイ」

居眠りでもしていたらしい、下女のお駒は、手燭てしよくを持って飛込んで来ましたが、その時はもう、何もかも済んでおりました。お市はすっかりこと切れて、三十女の豊満な肉体を、浅ましく歪めたまま夫の膝に抱き上げられ、越後者の、身体だけは丈夫そうな下女のお駒は、手燭を持ったまま、ガタガタ顫ふるえていたのでした。

二

「八、こういうわけだ。石原いしはらの兄哥あにきの縄張だが、利助兄哥はあのとおり身体が悪くて、娘のお品しなさんが代って仕事をしている有様だから、どうすることも出来ない。それに、越後屋佐吉という人が自分でやって来て、相手が人間だか化け物だか知らないが、あんまり人を馬鹿にしたやり口だから、何とでもして女房かたきの讐なぐさを討ってくれという頼みだ」

捕物名人銭形の平次は、子分の八五郎——一名ガラツ八へ妙にしんみりした調子で話して聞かせました。

少し人間は半間はんまですが、案外鼻の利く八五郎に、少しでも事件を扱わせて、行く行く立

派な御用聞に仕立ててやろうという平次の腹でしょう。

「親分、大変面白そうだが、下手人は一体何でしょう」

「それが解らない」

「鎌鼬かまいたちか何かじゃありませんか」

小さい旋風せんぷうが空中に真空の場所を作るために、そこへ行合わせた人の皮肉を破って、

体内の空気が出ることがあるのを、昔は鎌鼬または神逢太刀かみあいたちと言って恐れたものです。

「相変らずお前はお先つ走りだね、庭の雪には下駄の跡があつたんだよ」

「へエ——」

「鎌鼬がまさか下駄を履いて来はしまい」

と、平次。

「それじゃやはり人間かな」

どうもはなはだ血の廻りが宜しくありません。

「お市とかいう女房の喉笛のどぶえを下から飛付いて搔き切ったんだ。とにかく人間には相違な

いだろう」

「佐吉夫婦に怨みうらのある人間はありませんか」

「ありすぎるほどだ」

「厄介な野郎だね」

「角兵衛獅子の親方と、女衞ぜげんと、金貸しをやってたんだ。どこに敵がいるかわかるものか」

「へエ——」

「ここで考えたって始まらないよ。とにかく、行ってみるがいい、思いの外手軽に解るかも知れない」

「親分は？」

「俺はそれからの事にしよう。他に用事もあるから、とにかく、今戸の殺しはお前に任せよ。いいかい、ガラツ八」

「弱つたなア」

「弱ることがあるものか、八五郎もこの辺が手柄の立て所じゃないか」

「そういえばそれに相違ないが」

子分思いの平次は、これほどの手柄を、ガラツ八に譲ってやるつもりでしょう。二つ三つ肝腎な注意をすると、わが子の初陣ういじんを送り出す親のように、緊張した心で今戸の現場へ送り出してやるのでした。

ガラツ八が越後屋へ着いたのは、事件のあつた翌^{あぐ}の日の昼頃、係り同心が町役人と一緒に引揚げた後で、お市の死体は奥の一と間へ寝かし、三輪^{みのわ}の万七という顔の古い御用聞が、二人の子分と、振舞酒^{ふるまいざけ}に酔つて、ボツボツ引揚げようという間際でした。

「お、八兄哥^{あにい}か、大層鼻が良いんだネ」

と万七。まさか主人の佐吉が、親分の平次へ頼みに行つたとは知りません。相手が甘いとみて、少しからかい面になります。

「三輪の親分御苦勞様で、——石原のが身体が悪いんで、あつしが申し訳だけに覗きに来ましたよ。三輪の親分が居て下されば、ここから帰つてもいいくらいのもので、——ヘツヘツヘツ」

これは、親分の平次に、万一、三輪の万七に逢つたらこうとくれぐれも教わつてきた口上。まことに行届いておりますが、お仕舞のヘツヘツヘツだけが余計です。

そう言われると、万七も悪い心持はしなかつたのでしよう。それに、どっちにしても石原の利助の縄張うちで、八五郎をからかいすぎるわけにもいかず、もう一つは、事件がいやに神秘的で、容易に見当が付きそうもないと思つたのでしよう。

「そう言われると年寄りの出しや張る幕じやないようだ。八兄哥、話は聞いたろうが、ど

うもこの殺しは見当が付かないぜ」

そう言いながら、二人の子分と顔を見合わせて、妙にニヤニヤしております。

意地の悪そうな四十男。世上の噂では、二足の草鞋わらじも履いているという話。八五郎の相手には、少し荷が勝ち過ぎます。

三

越後屋佐吉というのは、四十を越したばかりの、北国ほっこくもの者らしい鈍重どんじゅうなうちに、なんとなく強したたか味のある男ですが、女房が不思議な殺されようをしたので、さすがに、すっかり度を失っております。

早速八五郎を一同へ案内して、北枕きたまくらに寝かしてある、女房お市の死体を見せてくれました。覆いを取ると、斬られて死んだ者によくある、白蟬はくろうのような感じのする顔で、年の頃三十五六、神経質な口やかましい女ということは、八五郎にもよく受取れます。

傷は頸くびの右の方から喉笛へかけて、斜め一文字に深々と口を開いて、見るも不気味な有様、これでは一たまりもなかったでしょう。

「血が出ましたか」

「出たの出ないの——庭の雪が真つ赤になりましたよ」

有名な銭形の平次が来ずに、少し好人物らしい子分の八五郎が来たのが、佐吉の癪にさわったのでしよう、物の言いようが少しばかり、突慥貪です。

「フーム」

ガラツ八は唸りました。

「八兄哥、血のことを気にするようじや、鎌鼬かまいたちという見当だね。鎌鼬は傷の深い割に血の出ないものだっていうが、江戸は上様うえさまのお膝元で、鎌鼬は昔から出ねえことになっているぜ」

と首を出した万七、冷笑気味な口吻こうふんですが、馴れた目だけに、どこか鋭いところがあります。

「……………」

ガラツ八は黙って点頭うなずきました。鎌鼬でないことは、親分の平次にも言われましたが、傷口その反り具合があまりに見事だったので、ツイ自分の最初の心に立ち返ったのでした。

「それによ、八兄哥。左利きの鎌鼬つてものはあるめえ」

万七は言い得て妙といった顔で、死体の右の頸筋——人間の手で上から切り下げた、斜めの傷口を指すのでした。

「曲者は下駄を履いていたそうですね」

とガラツ八。

「踏み荒らしてしまったが、まだ庭に雪がありますから、見当ぐらいは付きます。こうお出でなさい」

佐吉に案内されて、次の間へ行くと、縁側に近く長火鉢を置いて、すべての調度は昨夜のまま、障子を開けて一と目庭を見ると、なるほどさんざんに踏み荒らしましたが、消え残る雪の上には、血とも煤とも付かぬ程度に、薄赤い斑点はんでんが見られないことはありません。

「下駄の跡は一人でしたか」

「庭の中にはかなり足跡もありましたが、みんな同じ齒の跡で、木戸から入って出たのは一人分だけでしたよ」

ガラツ八も途方にくれました。十坪ばかりの狭い庭には、亭主の殺風景な性格を反映して、石一つ、植木一本ない有様、わずかに戸袋ちようずばちの側の手洗鉢の下に、南天なんてんが一株あり

ますが、それといつても、人間が潜りもどうも出来るほどのものではなく、狭い場所一パ
イに建てた家で、たった一つの庭木戸の外には、往来へ出る道も、表へ廻る路地もありま
せん。

「木戸の向うは川岸^{かし}つ縁^{ぶち}の往来ですね」

「そうですよ、あの雪で昨夜^{ゆうべ}は人通りも少なかったようですが、それでも宵のうちですか
ら、チラホラ、通らないことはありません」

と佐吉。

「この辺に、お前さんを怨^{うら}んでいる者はありませんか」

「ありますよ、どうせ良く言われつこのない性分で、町内の人皆んな敵^{てき}みたいなもので
さア——」

少し言い草は乱暴ですが八五郎の半間な調子に業^{わざ}を煮^なやした故^{せい}もあつたでしょう。佐吉
は忌^{いまいま}々しそうに舌打ちをしました。

四

「雇人やといにんは？」

「二人いますよ。一人は越後者で、お駒という下女、一人は房州ぼうしゅうもの者で、これは借金の取立てや使い走りをさせておりますが、与次郎よじろうという男。もつとも、この与次郎の方は、町内の銭湯へ行っていて、女房が殺された時は家に居ませんでしたよ」

佐吉のそう言うのを聞きながら、八五郎は障子を締めると、今度は家の中の間取りを見て廻りました。入口の格子の右が女中部屋で、その先がお勝手、お勝手はすぐ横町の路地へ、木戸一つで通ずるようになっておりますが、御用聞の出入りがあるので、この辺の雪も踏み荒らされております。

入口を隔へだてて、左が死体を置いてある部屋、その奥が夫婦の居間で、これは昨夜事件のあったところ、妙な間取りで、座敷なんどか納戸を通らなければ、居間から直接お勝手へは出られません。

下女のお駒は、流し元で遅い朝飯のお仕舞をしておりました。二十三四の色白の女で、様子もそんなに悪くありませんが、半面の大火傷やけどの痕あとで、顔を見るとがっかりします。

姉妹きょうだい二人、角兵衛獅子に売られたのを、佐吉が引取ってしばらく稼かせがせていました。が、角兵衛を廃業してからは、下女にして使って、少しは給金でも溜めさせて、故郷の越

後へ帰すつもり——、と佐吉は問わず語りに説明してくれました。

もつとも、このお駒というのは、妹の方で、姉はお才さいといって、大変に良い縹きりよう緞どうだったが、一年ばかり前に死んでしまった——とこれも佐吉の話。自分の事を噂されながらも、お駒は鈍感な女によくある無関心さで、機械的にお勝手の仕事を続けております。

「お駒さん、昨夜は驚いたろう」

ガラツ八が水を向けると、

「驚いたよ、お神かみさんがおつ死ちんだんだもの」

何を当り前な事を——と言わぬばかりの面構つらがまえは、すっかり我が名御用聞の八五郎を憂鬱ゆううつにしています。

「お神さんの殺された場所で、何か見るか聞かしくなかつたかい」

「旦那が大きな声で、灯あかりを持って来いつて言うから、棚たなの上の手燭へ灯を移して、大急ぎで飛んで行つただよ、何を聞くもんか」

これでは取り付く島ありません。

角兵衛獅子をやつて歩いたというのは、たぶん十年も前のことでしょう。見たところ、楽な奉公によく肥ふとつて、そんな芸当をやつた身体とも見えないのです。

ガラツ八は仕様事なしにお勝手口の外を眺めました。取込んでろくに雪も搔かなかつたのでしよう、下男の与次郎が、浅黄あさぎの手拭を頬冠ほおかむりに、竹たけ箒ほうきでセツセと雪を払っておりす。師走しわすの薄い日に、昨夜の雪がまだ解けそうにもないのですから、仕事をしていると、寒さが骨身にこたえるのでしよう、時々立止まっては、ハアと拳骨げんこつに息を吹掛けております。

「八兄あにい哥」

後ろから、肩を叩いたのは、三輪の万七。

「何ですえ、親分」

「気が付かないか」

「ヘエ——？」

「それならいい、後で縄張がどうの、石原がこうのって文句は言わないだろうな？」
妙に絡からんだ物の言い廻しです。

「下手人の目星でも付きましたか」

「そうだよ。八兄哥、後学のために話そう、あれを見るがいい」

万七の指したのは、お勝手の外を掃いている、与次郎の箒を持つ手です。

「……………」

「あの箒を持つ手が、恐ろしく不自由なのに気が付かないかい」

「そう言えばそうかも知れませんネ」

「そうかも——じゃないよ、あの与次郎という男は確かに左利きだ」

「えッ」

「先刻、下手人は左利きだ——って俺が口を滑らしたのを小耳に挟んで、疑われたくないばかりに、不自由な思いをして右利きのような顔をして、俺達から見えるところで雪を掃いてるんだ。イヤな細工じゃないか」

「なるほど」

万七に注意されて、そつと与次郎の方へ目を走らせると、箒を持ったのは右手には相違ありませんが、なるほど不自由そうで、その作為のあとが、一と目でわかります。

「主人に聞くと、あの野郎、たしかに左利きだという事だ。ね、八兄哥、御用聞はこういう細かいところへ眼が届かなくちや物にならねえよ」

万七はそう言いながら女物の下駄を突っかけてお勝手口へ出る。

「与次郎とかいったネ、ちよいと訊きてえことがある、番所へ一緒に来て貰おうか」

釘拔くぎぬきのような手が、ピタリと、箒を持つ手頸に掛りました。

「あつ、何をするんだ」

立ち辣すくんだ与次郎、浅黄の頬冠りこそしておりますが、苦味走った三十男、咄嗟とつさの間に、万七の手を振りもぎつて逃げようとすると、

「御用ツ」

「神妙にしろツ」

路地から二人の子分が疾風しつぷうのごとく飛込んで来るのでした。

五

万七にしてやられて、ガラツ八の八五郎は、驀まっしぐら地に神田へ取って返しました。

「親分どうかしておくんなさい。あつしはこんな恥を搔かされたことがない」

「馬鹿野郎、また何かドジな真似をしたんだろう。見てきた通り、真っ直ぐに話してみな」
銭形の平次は、八五郎を叱り飛ばして、報告の順序を立てさせました。

「何？ 庭には、川岸かしの往来に向いた木戸より外ほかに入口も出口もねえ、——銭湯へ行つた

と言う、与次郎が疑われるわけだな、足跡の様子では下駄は、女物か、男物か」

「それが時が経っているのと、さんざんに踏み荒らしているから、まるつきり解らねえ」

「仕様がねえなア、銭湯へは行つて訊いたろうな、越後屋の女房が殺された時刻に、与次郎が行つていたかどうか」

「そんな事に抜かりはねえ。朝日湯の番台の親爺おやじに訊くと、亥刻よつ（十時）少し前にやつて来て、自慢の喉で新内を喰りながら半刻はんとき（一時間）ばかりポチャポチャやつていたつて言いますぜ」

「人でも殺そうというほどの野郎なら、わざと半刻ぐらいは下手な新内でも喰っているだろう。後か先に、ほんのちよいと庭口へ廻れば、仕事は済むんだから」

「親分までそのつもりじゃ話が出来ねえ」

ガラツ八はすっかり悄気しよげてしまいます。

「ところで、死骸の傷は斜め横に真一文字に付いてると言つたね」

「そうですよ」

「鎌かま 鼬いたち なら、銭形に付くか、筋か骨に沿つて曲つた傷が付くから、やはり人が切つたに間違いはないね、——ところで、切口の肉は、どんな工合になっているんだ」

「それが可怪おかしいんだよ、親分、恐ろしく反そつて、何かこう鉞まさかりでも割いたような工合だ」
 「斧おのや鉞おので、喉のどを割く奴はあるまい、峰の高い刃物——たぶん合せかみそり剃刀かな」

「えッ」

合せ剃刀と睨にらんだのは慧眼けいがんですが、それにしても下手人はますますわからなくなるばかりです。

平次はとうとう今戸まで出掛けてみる気になりました。三輪の万七の鼻を明かすつもりは毛頭なかったのですが。

「下手人は左利きと聞いて、自分の左利きを隠そうとしたというのはおかしいな。そんな事をしたところで、主人か下女に訊かれれば、すぐ解ることだから、脛すねに傷持つ者なら、かえってそんな細工はしないはずだ。これは少し面倒なことになるかも知れないよ」

平次はそう言いながら、ガラツ八を案内に、今戸へ出かけて行つたのです。

越後屋へ行く前に、近所でいろいろ噂を聞いてみましたが、佐吉夫婦の評判はまことにさんざんで、冗談にも褒める者は一人もありません。

慾いんごうが深くて因業いんごうで、若い時からずいぶん人を泣かせてきた様子ですから、どこに深しんえ怨いんの刃やいばを磨とぐ者があるかもわからない情勢です。

下男の与次郎が、殺されたお市と何か関係でもあるのではないかという疑いも、一応は持ってみました、これも問題になりません。お市は四十近く、与次郎は三十になったばかり、女の方はヒステリックな、どちらかといえど醜女ぶおんなで、与次郎は、こんな仕事をしている者にはもつたいないような好い男、町内の娘つ子が大騒ぎをしているばかりでなく、岡場所やけころへ握り拳にぎこぶしで遊びに出かけるほどの色師いろしです。

金が目当て——ということも考えられますが、それなら、女房だけ殺して、姿を隠したんでは一文にもならず、二度出直す時間もあつたはずなのに、それっきり逃げ出してしまつたのは、多分、下手人の方でも、人を一人殺して、面喰らつたためだろうと思われます。平次は一応家の内外を調べた上、いよいよ自分の考えを確かめたらしく、主人の佐吉に何やら耳打ちをして、誰を縛るでもなく、懐手ふところのまま神田へ帰ってしまいました。

それから三日目の朝、越後屋の佐吉は、蒼あおくなつて、平次のところへやって来ました。

「親分、昨夜ゆうべもやって来ましたよ」

「えッ」

「与次郎が縛られたから、それでいいのかと思うと、あれは三輪の親分の見当違いでした

ね」

「どうなすったんだ。詳しく話してみなさるがいい」

平次も思わず膝ひざを乗り出します。

「こうなんです、——女房の葬とむらいを済ませて、やれやれと思うと、また雪でしょう。お駒に一本つけさして長火鉢の前でチビチビやっていると、かれこれ亥刻よつ過ぎだったでしょう。庭の雨戸を、またトン、トン、トンと叩く者があるのです」

「……………」

平次も、側で聞いているガラツハも、思わず、ぞっとしました。

「しばらく黙っていると、女のか細い声で、——ちよいと開けて下さい——と言ったようですが、なにぶんあの騒ぎの後でしょう、頭から水をブツかけられたようになって、恥ずかしい話ですが動くことも出来ません。そのまま凝じつとしていて、それっきりあきらめて帰った様子です」

「……………」

「翌あく朝、夜の明けるのを待ち兼ねて、庭を開けてみると、下駄の跡が一パイ」
佐吉はゴクリと固唾かたずを吞みます。

「それは面白くなつて来た——越後屋さん、帰ったら、近所中へこう言いふらして下さい——昨夜も変な野郎が来て今度は俺を誘き出そうとしたが、雪のせいで腹が痛くて顔を出せなかった。今度来たら、キツと女房の下手人の顔を見定めてやるから——と」

「少しも面白くはありませんが、やってみましょう。だが、私はもう一度来ても、顔を出すのは御免を蒙りますよ」

強か^{したた}者らしい佐吉も、この「見えざる敵」にはすっかり脅か^{おびや}された様子です。

「大丈夫、相手は雪の晩でなきやア来ないと解つたようなものだから、この次の雪の降る晩に、私か八五郎が、そつと戌刻^{いっく}（八時）前から行つて庭口から入れて貰いましょう。それなら心配はないでしょう」

「ヘエ——、まア、そうまでして下されば」

佐吉は呑込み兼ねた様子で歸つて行きました。

六

よく雪の降つた年ですが、それから七日ばかりは晴続き、押詰つて、二十四日、夕景か

ら催した雪が、宵には綿を千切つて叩き付けるような大降りになりました。

越後屋から迎えを待つまでもなく、ガラツ八は今戸へ駆け付け、庭口からそつと例の部屋へ入り込みました。

飲み物も食い物もフンダンに用意させましたが、人が来ることは誰にも話させず、下女のお駒も、宵のうちから床へ入れて楽寝をさせ、佐吉一人、淋しく待っているところへ、八五郎が行つたのですから、佐吉の喜びというものはありません。

半分は手真似てまねで物を言つて、長火鉢を間にした差向い、妙に黙りこくつて飲んでいると、やがて、亥刻よつ（十時）過ぎ。

雨戸は一種のリズムを持つて、トン、トン、トンと鳴ります。八五郎は懷の十手を抜いて、そつと立上がると、

「待つて下さい。私の顔を先に見せなきやア、逃げるかも知れません」

佐吉もすっかり胆きもが坐つた様子で、八五郎を押えると、雨戸へ手を掛けてサツと押し開けました。

闇から湧き上がったように、サツと吹込む一団の吹雪ふぶき、それに包まれると見るや、
「あッ」

佐吉は額を押えて縁側へ倒れました。

「曲者くせものッ」

続いて飛出す八五郎、一気に闇の庭へ、跣足はだしで飛降りましたが、四方は塗り潰つぶしたような大吹雪で、黒い犬ところ一匹見付かりません。

引っ返してみると、額から頬へ見事に斬り割かれた佐吉、ようやく起き直って、血だらけな半面を両手で押えているのでした。

それからの騒ぎは書くまでもありません。幸い傷は浅かったので、用意の焼酎しょうちゅうで洗って、晒さらしでグルグル巻くと、寝呆ねぼけたお駒を叩き起して、町内の外科を呼ばせました。

少し落着いたところで、いろいろ訊いてみましたが、ただ、雨戸を開けると同時に、一団の白い吹雪を顔へ叩き付けられたように覚えると、額から頬へ、焼鑊やきごてを当てられたように感じて引っくり返ったというだけの事、誰が斬って、どうして逃げたかまるっきり見当も付かない始末です。

翌る朝、神田から錢形の平次が駆け付け、三輪の万七もやって来ましたが、庭の足跡は、踏み荒らされない代り、今度は雪に埋まってしまって、八五郎が入ったのも定かでない有様、曲者はどこから来て、どこへ逃げたか、嗅ぎ出す手掛りというものは一つもありませ

ん。

さんざん責めたが、何としても白状をしない与次郎は、これを機会しおに許されて帰りました。お市を殺したのも、佐吉を襲ったのも、手口は全く同じことですから、三輪の万七も、このうえ与次郎を責める口実ありません。

それに、銭形の平次は、

「三輪の、そう言っちゃ済まないが、下手人は左利きじゃないよ」と言い出したものです。

「えッ、どうしてそんな事が解るんだ」

万七の唇は少し尖とがりますが、平次は事もなげに、

「刀か脇差だと、これは左利きの業わざだが、傷の工合じや、どうしても得物えものは合せ剃かみそり刀だ。ネ、そんな短い物で人の命でも奪とろうとすると、逆手さかてに持たなきやア役に立たないよ。右の喉笛や、右の頬を、斜めに斬り下げたのはそのためだ。突き傷のように、恐ろしい力で下へ斬り下げているだろう」

「なある——」

三輪の万七、一言もありません。

しかし、右利きとわかったところで、下手人の当りが付いたわけではありません。右利きは左利きの十倍もあるのですから、わずかに、与次郎が下手人でないということが、消極的に解つただけの事です。

七

その時、妙な者が訪ねて来ました。

「銭形の親分さんが来ていなさるそうですが、ちよいとお目にかかつて申し上げたいことがあります」

お駒に取次がせたのは、この辺に網を張つて、吉原へ通う客を拾う辻駕籠つじかごの若い者、――といったところで、四十過ぎの世帯しよたい疲れの目立つ、不景気な駕籠屋が二人でした。

「私に用事というのは、お前さん達かい。取込み中で、お通しは出来ないが、ここで聴かして貰いましょう。どんな事なんだい」

銭形の平次は、上がりかまち框へ煙草盆をブラ下げて来て、お駒に座蒲団などを持って来させました。

「昨夜、実は妙なことがあつたんです。——言おうか言うまいか、相棒とも相談したんですが、此家ここのお神さんが殺されたり、旦那が怪我をなすつた——ことを聞くと、黙つてもいられません」

「そうともそうとも、気の付いた事があつたら、何でも話した方がいい。決して掛り合いなどにはならないようにしてやるから」

「有難うございます、実はこうなんで、親分さん——」

年取つた方の駕籠屋の話というのは、実に奇怪を極めました。

——昨夜、亥刻よつ少し過ぎ、この二町ばかり先の稲荷いなりの祠ほくらの前で、降る雪を凌しのぎながら、少し小止みになつたら、馬道の方へでも出て、吉原通いの客を拾おうと相談をしていると、どこから出て来たか、チヨコチヨコと現れた一人の娘が、白い手拭てぬぐいを吹き流しに冠かぶつて、観音様まで大急ぎでやつてくれと言つたのだそうです。

どうせ帰り道、相手は新造しんぞうですから、賃銀ちんぎんなんかいいかげんに定きめて、駕籠たれの垂たれ上げる、娘は小風呂敷包みを持ったまま、馴れた調子でポンと乗りましたが、わざわざ寒い川岸を通して此家ここの裏口のあたりまで来ると、急に用事を思い出したから、ここで降ろしてくれ、と言うのです。

争うほどの事でもないのです、そのまま駕籠を停めたのは、ちょうど此家の裏口、垂を上げると、中から出たのは、先刻の松坂木綿らしい粗末な綿入れを着た娘とは似も付かぬ、縮緬ちりめんの白無垢しろむくを着て、帯まで白いのを締めた、鷺娘さぎむすめのような、凄まじくも美しい新造だったのです。

狭い駕籠の中で、どうしてそんな早変りが出来たか、渡世の駕籠屋も想像が付きません。とにかく、急に臆病風に誘われて、定めた駕籠賃ももらわずに、山の宿しゆくの方へ一散に逃げ出してしまったという話――。

「親分さん、お狐様か雪娘か知りませんが、どうもろくなもんじゃございませんよ。御用心なさいまし。へエへエ――こんなにお駄賃だちんを頂いてはすみません」

二人の駕籠屋は、余分の駄賃を貰った上、所、名前を言って帰ってしまいました。

「ね、錢形の、こいつは鎌鼬かまいたちじゃなくて、お稻荷様かも知れないぜ。主人は鳥居へ小便でも掛けたことがあるんじゃないか」

万七は妙にニヤリニヤリしておりますが、平次はそれを聞くと、追っ立てるように外へ飛出しました。

裏口は往來を距へだてて大川。

もう少し先へ行くと都みやこどり鳥と、瓦屋かわらやが名物ですが、この辺はまだ町の中で、岸にはいろいろのゴミが、雪と一緒に川面かわもを埋めております。

「八、物干竿ものほしざおを一本借りて鳶口とびぐちを結ゆわえて来い」

「へエ——」

持って来た二間竿。

先に鳶口を付けて、川面の雪と雑物とを掻き廻して行くと、間もなく妙なものが引つ掛りました。

「おやツ」

引上げてみると、少し碧血あおちに染んだ白無垢。紐で縛つてありますが、ほどくと、まぎれもない上質の白縮緬で、白羽二重帯まで添えてあるのです。

「おやツ、これはお葬とむらいで着るのとは違うぜ」

と万七。

「吉原なかで、花魁おいらんが八朔はっさくに着る白無垢だよ。三輪の、お狐様じゃないようだね」

平次はそう言つて、考え深く水漬みずづかりの白無垢をひろげました。

八

白無垢は出ましたが、下手人はそれつきりわかりません。娘を乗せて来たという駕籠屋まで引つ張り出して、来た道を逆に、稲荷の社^{やしろ}まで探して行きましたが、その辺には、佐吉の鳥^{からすがね}金を借りて、ひどい目に逢わされている家は、門^{かどなみ}並の有様ですから、どこの娘をしょつ引いていいのか、縛ることを好きな万七も、手の下しようがなかったのです。

佐吉のために、身を売った娘もあるうし、女衞^{ぜげん}の真似をしている時、さんざん人も泣かせたはずですから、怨^{うら}みを買った覚えは算^{かぞ}え切れないほどあるでしょうが、しかし、八朔の白無垢を着て、雪の夜に吉原から忍んで殺しに来るほどの大胆な花魁があろうとは想像も出来ないことです。

佐吉の傷は間もなく平癒^{へいゆ}し、お駒と与次郎は、相変らず忠実に勤めておりますが、それからは、別に変ったこともありません。もつとも、佐吉が強^{ごうよく}慾で、二人の給金を何年越し払わないそうで、イヤな思いをしても、急に飛出すわけにはいかない事情もあつたようです。

その次に雪の降ったのは、明けて翌年の正月十三日。この時は朝から粉雪^{こゆき}が降り続いて、

夕刻には、三寸ばかり積り、それからカラリと晴れて、大変な美しい月夜になりました。「今晚きつと下手人を探してお目に掛けますから、掛り合いになった人を、皆んな集めておいて下さい」

平次からの使いで、八五郎が越後屋へそう言いに行つたのは夕景。それから支度に取りかかつて、三輪の万七とその子分、銭形の平次とガラツ八、それに与次郎とお駒、主人の佐吉、これだけ集めておいて、いつぞやの駕籠屋二人に、酒手さかてをやつて稲荷様の前に網を張らせ、浅草へ行く娘でなければ、乗せてはならぬと言ひ付けておきました。

相変らず酒が出ます。お勝手も入口も締めず、用心が悪いようですが、名代の御用聞が二人いるのですから、空巢狙いの心配もなく、今晚は例の居間の長火鉢の前へ、一人残らず集まつてしまいました。

亥刻少し過ぎ、何となく夜の寒さが、背に沁み渡る頃、みんなが期待した通り、——
トン、トン、トン、

雨戸は鳴ります。一同はぞつと顔を見合せました。続いて、

「ちよいと、ここを——」

と、か細い女の声。佐吉も子分達もガラツ八も与次郎も顔色を失いましたが、一向平気

なのは錢形の平次だけ。中でもお駒は袖に顔を埋めて、畳の上に突つ伏してしまいました。「さア、お駒さん。お前でなきやアならない事がある。行つてあの雨戸を開けるんだ」と、平次、ガタガタ顫えているお駒を抱き起すように、縁側へ伴れ出しました。

続いて、万七、佐吉、ガラツ八、与次郎。

「お駒さん、確しつりするんだ。あれは、お前の姉あねさんのお才さいだよ、玉屋小三郎たまやこさぶろうの抱かかえ、一時は全盛を謳うたわれた玉紫花魁たまむらさきおいらんだ。怖がることはない」

「あれッ——」

お駒は振りもぎつて逃げようとしたが、平次は後ろから羽交はが締いめにして、離そうともしません。

続いてまた、トン、トン、トン、と叩く音、陰いんに籠こもつたその物凄さというものは——。

「お駒さん、あれ、あれ、お前の姉さんが呼んでいるじゃないか。越後屋佐吉——この主人に、角兵衛獅子で何年となく虐めいじ抜かれた上、年頃になつて、光り輝くように美しくなると、自分の娘分にして、玉屋へ年いっばいに売り飛ばされ、その上、佐吉夫婦が、絞しぼつて、絞つて、絞り抜いて、悪い病氣に罹かつて、身動きの出来なくなるまで絞り取られた姉のお才だ」

「……………」

平次の言葉は、物凄い空気の中に、地獄の判官の宣告のように響きました。

「お前の姉が、佐吉夫婦を怨^{うら}んで、糸のように痩せ細った身体で、頸^{くび}を縊^くつて死んだのは、ちょうど一年前。佐吉夫婦を怨^{うら}んで、よく似合うと言われた八朔^{はつさく}の白無垢^{しろむく}を着て、雪の夜を選んで仕返しに来るのも無理はない。——これだけ話せばあの外から雨戸を叩くのは、誰だかよく解るだろう。さア、お駒、怖がることはない。思い切って開けてみるがいい。そら、また叩いているじゃないか——」

何という恐ろしい緊張でしょう。主人の佐吉は積^{せき}悪^{あく}に責めさいなまれるように、縁側へ崩折れてガタガタ顫^{ふる}え、ガラツ八も、与次郎も、万七でさえも、顔色を失って、成行きを見詰めるばかりです。

「お駒、お前が開けなければ、俺が開けてやる。それ」

平次の手は雨戸にかかると、アツと言う間もなく一枚引開けましたが、外は、雪の上に照る十三夜の皎^{こう}月^{げつ}。狭い庭はたった一と眼に見渡されますが、物の翳^{かげ}もありません。

「玉紫の花魁。よく聴くがいい、お前の妹のお駒は、一生困らぬだけの金を持たせて、明日にも故郷の越後へ帰してやる。もうここへ出ちゃならえぞ、解ったか——南無阿弥陀仏」

平次が月の庭へ手を合せて拝むと、お駒も、佐吉も、ガラッ八も、釣られたように、念仏となを称えて、白々とした庭を眺めやるのでした。

翌あくる日、お駒は溜たまった給料を受取った上、外ほかに手当百両を貰い、平次とガラッ八に送られて、故郷の越後へ発たちました。確かな道みちづれ伴を見付けて、板橋から別れる時、

「親分、この御恩は忘れません」

お駒は何べんも何べんも繰り返して、江戸へ引返す平次の後ろ姿を拝んでおります。半面大焼痕おおやけどの女ですから、道中もまず無事でしよう。平次は重い荷をおろしたような心持で、ガラッ八と一緒に帰って来ました。

「ね、親分、あの下手人は玉紫とかいう花魁の幽霊なんですかい」

とガラッ八、少し獅子ししつ鼻ばながキナ臭くうごめきます。

「馬鹿ッ、幽霊が人を殺してたまるもんか」

「すると」

「お前だから話すが、人に言うな、あれはみんな、お駒の細工さ」

「へエ——」

「お勝手からそつと出て、遠廻りして庭木戸あだに入って、姉の仇を討つつもりだったんだよ。帰る時は身体が軽いから、羽目を越して下肥汲しもごえくみの通る細い路地から、アツという間に自分の部屋へもぐり込んだのさ——」

「白無垢で、雪の晩だけねらったわけは？」

「白無垢は姉の形見さ。あんなものが、玉屋から届いたガラクタの中にあつた事を、佐吉も気が付かなかつたんだ。稲荷様へ行つて、駕籠へ乗つて中で着換えたのは、わざわざ遠方から来た、怪物えてものに見せようという細工さ。あの女はあれでなかなか馬鹿じゃないんだよ」

平次の話は明快ですが、たつた一つ、まだガラツ八にも解らないことがあります。

「昨夜ゆうべのはすると誰です。お駒も中に居たはずだから——」

「馬鹿だなア、お品さんは、そんな事にかけてや、申分のない役者だよ。稲荷様から辻駕籠に乗つて、お駒がやつたとおりに運んだまでの話さ——それでもしなきやア、佐吉は百両という大金を出す気にならないだろうし、いつかはお駒が下手人ということが解つて、三輪の万七兄哥あにきなどに縛られるよ」

昨夜の白無垢は、石原の利助の娘のお品とは、佐吉も万七も、当のお駒も気がつかなか

つたでしょう。

「へエ、そんな事をしてもいいんでしょうか」

「何をつまらない。御法度の敵討さえ、筋が立てば、大ビラにやらせる世の中じゃないか。姉妹二人十何年も死の苦しみを嘗めさせられて、その上姉が首を吊つたんだ。その仇を討った妹を縛れて言うなら俺は十手をお上へ返すよ」

平次は感慨深くそう言いました。滅多に人を縛らぬ、一名縮尻平次は、こうして「雪の精」を見逃してしまったのです。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（八）お跏文身調べ」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年12月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第七巻」中央公論社

1939（昭和14）年5月25日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1932（昭和7）年12月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2017年6月25日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

雪の精

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>